

## 論文 ミクロネシア・ヤップ社会における伝統の表象と実践 -- ヤップデーを事例として

著者	則竹 賢
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	45
号	1
ページ	2-21
発行年	2004-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007726">http://hdl.handle.net/2344/00007726</a>

# ミクロネシア・ヤップ社会における伝統の表象と実践

## ヤップデーを事例として

のり たけ まさる  
則 竹 賢

はじめに 問題の所在  
ヤップ社会の首長制  
ヤップデー  
ヤップデーについての語り  
人々にとってのヤップデー  
おわりに もつれ合う伝統

### はじめに

#### 問題の所在

ミクロネシア連邦ヤップ州には、ヤップデー（Yap Day）という州の祝日がある。ヤップデーは、ヤップ州祝日法（Yap State Legal Holidays Act）によって3月1日に設定されている。祝日法には、ヤップデーがヤップ州の伝統を祝う祝日であること、この日に様々な行事を行うことが明文化されている。こうした法の規定に基づき開催されるのが、ヤップデーフェスティバル（Yap Day Festival）<sup>（注1）</sup>である。ヤップデー会場は踊りや衣装をはじめとする様々なヤップの伝統で飾られ、観光客も含めて数多くの人々が来場する。その様子はまさに「伝統の祭典」と呼ぶにふさわしい（写真1）。本稿は、ヤップデーにおいて様々な語られ実践される伝統の諸相を分析することを目的としている。

オセアニアの伝統をめぐる研究は1980年代よ

り活発となった。当初の議論は、西洋近代の枠組を前提とした「創られた伝統」と地域社会の日常生活で営まれる「本来の伝統」を区別する伝統の創造論〔ホブズボウム／レンジャー 1993〕の立場から、政府や現地の知識人などによる伝統や文化の語りに潜む「オリエンタリズムと同根の近代の知と権力によるアイデンティティの政治学」〔小田 1997a, 841〕を批判した〔Keesing 1989; Keesing and Tonkinson 1982〕。しかしこれらの研究では、日常生活における「本来の伝統」と近代的な政治性を帯びた「創られた伝統」がどのような関係を結んでいるのかが問われることはなかった〔小田 1997b, 194〕。

その後の研究は、「本来の伝統」と「創られ

写真1 2002年ヤップデー開会式の踊り



（出所）筆者撮影。

た伝統」との関係の検討ではなく、「本来の伝統」と「創られた伝統」の区別の否定へと向かった。この区別は、前者に真正性、後者に非真正性を認める本質主義的二分法に陥っていると批判されたのである。こうした批判は、地域社会の伝統は植民地支配という抑圧的な状況の中で対抗的に生成されたとする文化の客体化論 [太田 1998; Jolly 1992; Jolly and Thomas 1992; Thomas 1991; 1992] や、伝統の意義はその真正性ではなく近代との連続性にあるとする異種混淆論的なカストム<sup>(注2)</sup> 論 [Lindstrom and White 1994; White and Lindstrom 1993; 1997] において展開された。これらの議論は、植民地統治や国民国家形成の過程で展開される伝統や文化の語りをめぐる政治力学に焦点を当て、そこに「現地の人々」の「主体性」を見出してこれを評価した。しかしこれらの議論は、「創られた伝統」と「本来の伝統」の区別を放棄することで、研究対象を政府や現地人エリートらによる伝統言説に限定する傾向を正当化してしまった。その結果、地域社会の日常生活の場で人々が生み出す伝統の語りが等閑視されたまま、政府や現地人エリートらによる政治的発言としての伝統言説がそのまま「現地の人々の主体的な伝統の語り」として一般化される事態を生み出した。

最近では、以上のような研究動向への批判として、地域社会の日常生活で人々が語る伝統に関する実証的・理論的研究が行われている [石森 2001; 白川 2001; 則竹 2003; 吉岡 2000]。これらの研究は、日常生活における伝統と政治言説としての伝統とを区別しつつ、前者が必ずしも近代性を前提としない独自の概念を構成している点を指摘している。日常生活で語られる伝統の独自性に注目したこれらの議論は、伝統の

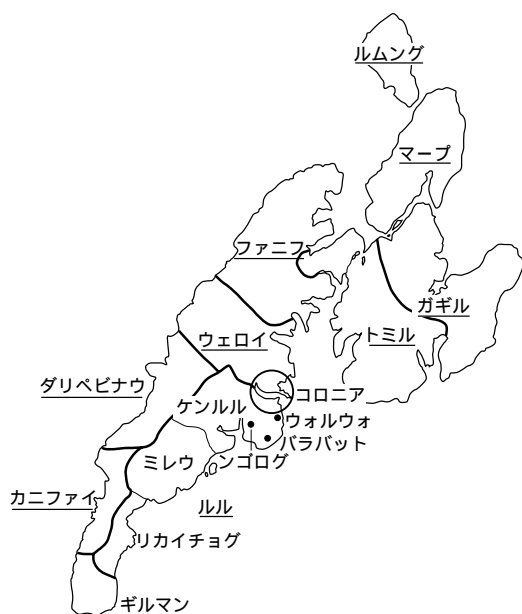
創造論が課題として残した「本来の伝統」と「創られた伝統」との関係を再検討する際の基盤を与えている。すなわちこの関係は、日常生活における伝統の語りと近代性を帯びた伝統の語りの関係として再定義されるのである。ただしこの関係は、一方から他方への単方向的関係として捉えられてはならない。そうではなく、近代性を帯びた伝統の語りがいかにして日常生活における伝統の語りを取り込んでいるか、そして近代性を帯びた伝統の語りが日常生活における伝統の語りの中でどのように位置づけられているかという、双方向的関係として捉えられる必要がある。すなわち、地域社会の日常生活における伝統の語りと近代性を帯びた伝統の語りの「もつれ合い」が記述・分析されなければならないのである [杉島 1999参照]。

以上のような理論的視座と問題意識から、本稿は、ヤップ州政府やメディアが語る伝統の語りと人々が日常生活の中で語る伝統の語りとの関係について論じる。まず最初に、ヤップ社会の首長制を本稿に関連する範囲で概観した後、ヤップデー成立の歴史を見る。次いで、ヤップデーをめぐって展開される、州政府やメディアの語りにおける伝統と一般の人々の語りや実践における伝統との差異を、具体的記述を通じて明らかにする。最後に、これら両者の伝統がどのような関係にあるのかについて分析する。

## ヤップ社会の首長制

ヤップ州の主島ヤップ島は北緯約9度、東経約138度にある陸島であり、2000年現在の人口は7319人である [Yap Branch of Statistics Office 2002] (図1)。島には127の村 (*binaw* <sup>注3</sup>) があ

図1 ヤップ島



る。島中の村は9種類の序列化された位階 (*thal*) のいずれかに属している (表1)。上位5位は首長村 (*pilung*)、下位4位は隷属村 (*pimilingay*) と呼ばれ、隷属村の土地と人々は首長村の管理下にある。村は、ドイツ時代に行政単位として設定された10の管区 (*municipality*) にまとめられている。各管区は、やはりドイツ時代に行政職として設けられた管区長 (*pilung ko falak*) に

よって統括される。原則的に、管区長には管区内の最高首長 (*pilung ni ga'*)、通常は管区で最高位の村の村長が就任する。現在でも、管区は州の行政単位として機能しており、管区長が管区行政の総責任者となっている。

村は、管区の外に、地理的位置とは無関係な2つの対立する同盟 (*ech*) のいずれか一方に属している。一方を首長同盟 (*ban ni pilung*)、他方を若者同盟 (*ban ni pagal*) といい、それぞれブルチェ (*bulche'*) とウルン (*ulun*) の位階に属する村が率いる。両同盟の対立は、ヤップ社会全体の最高位にある3人の最長老 (*pilbisir ko nam*) によって均衡が図られる。すなわち、ルル (*Rull*) 管区にいる最長老は首長同盟を、ガギル (*Gagil*) 管区にいる最長老は若者同盟をそれぞれ統括し、トミル (*Tomil*) 管区にいる最長老は両同盟を調停する<sup>(注4)</sup>。

これと類似した均衡は、村の政治構造にも見られる。理念的には、村は3人の首長、すなわち長老 (*pilbisir ko binaw*)、村長 (*pilung ko binaw*)、若者頭 (*langan e pagal*) によって統括される。長老は村会議の決定に対する許諾を表明する。村長は村会議の代表であり、村の土地 (*binaw*) と人 (*girdi*) の責任者である。若者頭

表1 村の位階と同盟

	首長同盟 ( <i>ban ni pilung</i> )	若者同盟 ( <i>ban ni pagal</i> )
首長村 ( <i>pilung</i> )	ブルチェ ( <i>bulche'</i> ) マセバン ( <i>mathban</i> )	ウルン ( <i>ulun</i> ) タセバン ( <i>tathban</i> )
	ドウォルチグ ( <i>daworchig</i> )	
隷属村 ( <i>pimilingay</i> )	ミリンガイ・ニ・アロウ ( <i>milingay ni arow</i> ) ミリンガイ ( <i>milingay</i> ) ヤググ ( <i>yagug</i> ) ミリンガイ・ニ・カーン ( <i>milingay ni kan</i> )	

(出所) 筆者作成。

は実際の労働を担う若者を統括する。彼ら3人の首長の下に、呪術師 (*tamerong*) や漁労長 (*pi-lung ko fita'*) などの首長がいる。首長の位は全て特定の家 (*tabinaw*) に属しており、その家の長が首長の「声」 (*lungun*) すなわち命令を発する。村人は、首長の命令には必ず従わなければならない。もし従わなければ、土地の取り上げ (*kol e binaw*)、さらには村からの追放 (*chu ko binaw*) といった制裁が加えられる。

ヤップ社会の首長制は今もなお、人々の日常生活において重要視されており、人々の間では、首長の決定には常に従わなければならないとされている。それだけでなく、ヤップ州はミクロネシア連邦で唯一、首長が州政府の政治の一翼を担うまでになっている。ヤップ州には、立法、司法、行政の三権を司る州議会、州裁判所、知事その他、伝統を司る2つの首長会議、すなわちヤップ島の各管区を統括する10人の管区長からなるピルン会議 (*Council of Pilung*) と、離島の首長 (*tamol*) からなるタモル会議 (*Council of Tamol*) が置かれている。両会議は1978年に設置された。州憲法では、首長会議が「伝統と慣習」 (*tradition and custom*) に関する権限を持つとともに、伝統と慣習に抵触する法案や政策に対する拒否権を有することが定められている。首長会議は、州政府の諸政策に伝統という裏づけを与える役割を期待されているのである [White and Lindstrom 1997 参照] (注5)。

## ヤップデー

ヤップデーの歴史はアメリカ信託統治時代に遡ることができる。今日の人々がヤップデーの前身と考えているのは、10月24日の国連記念日

(United Nations Day) の前後に開かれていた国連デー・フェスティバルである。当時の政府広報紙 (*The Rai View: RV*) の記事によれば、国連デーは現在の州都であるコロニア (*Colonia*) で開催され、昼間には競技会、夕方からは伝統的な踊りが行われていた [RV 1966, 12] (表2 (1))。国連デーにおける政府要人の演説では、国連の重要性についてのみが語られており、ヤップの伝統については全く触れられていない [RV 1963, 1]。国連デーは、伝統の讃美を目的としていなかったのである (注6)。

1967年、当時の議会 (注7) は、「ヤップの伝統に対して特別な配慮をする日」として、翌1968年より3月1日をヤップ・ディストリクト・デー (*Yap District Day*) とすることを決定した。1970年代初頭には、国連デーだけでなくこの日にも祭典が開かれるようになった [YSB 1990b, 5]。ヤップ・ディストリクト・デーのプログラムの詳細については、手元の資料からは明らかではないが、当時の新聞 (*The Carolines Observer: CO*) は、伝統的な踊りや石貨運びのデモンストレーションに加えて、ソフトボール大会や映画の無料上映などが行われたと報じている [CO 1977, 7]。また、当時議員を務めていた男性は「何人かのアメリカ人も含めて、人々はみな伝統的な衣装でやって来た。徒競走や水泳、カヌーレースがあった」 [Aoyama 2001, 3] と述べている。

1979年、ヤップ州の発足に伴い、議会はヤップ・ディストリクト・デーの名称をヤップデーに変更した (注8)。ヤップデーは「州民の伝統を確認するための祝日」と位置づけられ、ヤップデー委員会 (*Committee on Yap Day*) の設置が明文化された。委員会の役割は、ヤップデーの

表2 ヤップデーのプログラム内容

(1) 1966年国連デー

会場 開会式	コロニア カトリック神父の祈り ヤップ島議会議長，ヤップ地区行政官挨拶 プロテスタント牧師の祈り
競技会	100m 走，探し物競争，200m 走，障害物競走，重量挙げ，お手玉競争，400m 走，ココナッツの皮むき競争，高跳び，ピンロウジ取り競争，魚取り競争，リレー，やり投げ，椅子取りゲーム，幅跳び，バイクレース，マラソン，飴食い競争，ボートレース，水泳
踊り	

(出所) RV (1966) より作成。

(2) 1990年

会場 開会式	沿岸警備隊駐屯地跡地 カトリック神父の祈り ピルン会議長，州議会議長，州知事挨拶 プロテスタント牧師の祈り
競技会	100m 走，お手玉競争，綱引き，ココナッツの皮むき競争，バスケット編み競争，自転車競争，マラソン
踊り 受賞者発表	各競技，農業部門，漁業部門，手工芸部門

(出所) YSB (1990b, 4) より作成。

(3) 1996年

会場 開会式	沿岸警備隊駐屯地跡地 カトリック神父の祈り ピルン会議長，州議会議長，州知事挨拶 プロテスタント牧師の祈り
踊り 受賞者発表 文化活動 展示	農業部門，漁業部門，手工芸部門 ココナッツの皮むき競争，お手玉競争，バスケット編み競争，文化儀礼 手工芸品，農産物

(出所) Committe on Yap Day (1996) より作成。

(4) 2002年

会場 開会式	トミル管区集会場 カトリック神父の祈り 伝統的オープニングダンス ピルン会議長，州議会議長，州知事挨拶 プロテスタント牧師の祈り
踊り 受賞者発表 文化活動 展示	農業部門，手工芸部門，伝統的建築事業部門，環境絵画・作文コンテスト ココナッツの皮むき競争，銚投げ競争，お手玉競争，バスケット編み競争，首長の伝統的衣装，伝統的刺青，男女の位階・年齢別衣装，ヤップ文化の様々な側面の紹介 手工芸品，農産物，受賞絵画・作文

(出所) Committe on Yap Day (2002) より作成。

諸活動を監督し、農業、漁業、手工芸の諸産業への表彰を行うことであると定められた。1986年にはヤップデー委員会のメンバーが、ヤップ本島の首長会議であるピルン会議から2人、非政府組織のヤップ女性協会（Yap Women's Association）から1人、州知事から任命された2人の計5人からなると規定された<sup>〔注9〕</sup>。

上述のように、ピルン会議は州政府において伝統と慣習に関する権限を持つ。ピルン会議のメンバーをヤップデー委員会に加えることは、ヤップデーにおいて示される伝統を正当化するためには是非とも必要であったといえる。しかし法律を見る限り、この時点におけるヤップデー委員会の諸活動は、伝統の確認よりはむしろ農業、漁業、手工芸品といった産業活動に対する表彰に力点が置かれている。すなわち成立当時のヤップデーにおいては、伝統の確認よりも地元産業の育成の方が重要だったのである。しかしその後、ヤップデーの目的は地元産業の育成から伝統の確認へと次第にシフトしていく。

1990年のヤップデーは、州都コロニアではなく、島の北部にあるアメリカ沿岸警備隊駐屯地跡地で開かれた。1990年代に発行されていた州政府広報紙（*Yap State Bulletin: YSB*）によれば、1990年以前のヤップデーでは、伝統的な踊りに各部門の表彰のみが行われていた〔*YSB* 1990c, 5〕。これに対し、この年のヤップデーでは、陸上競技と伝統的な踊りという国連デーと似通ったプログラムが組まれており、プログラム上は「伝統の祭典」の雰囲気は薄まっている（表2（2））。しかし後で詳しく見ていくように、同年の州政府広報紙には、ヤップデーが伝統を認識する年に唯一の機会であること、伝統がアイデンティティの基盤であること、アイデンティテ

ィを確認するために伝統的衣装を身につける必要があることなどが、強い調子で述べられている〔*YSB* 1990a; 1990b; 1990c〕。したがって、1990年のヤップデーは、ヤップデーの目的がアイデンティティの基盤である伝統の確認へと移っていく過渡期に位置づけることができる。

翌1991年、ヤップデーの性格を明確にするという点で重要な法改正が行われた。この法改正により、ヤップデー委員会の役割に次の2点が追加された。すなわち、州民の伝統を「確認し表現する」（recognize and represent）ための諸活動を促進すること、および州民の伝統を確認し表現するための諸活動や業績に対する表彰を行うことである。この改正によって、ヤップデーで披露される様々なプログラムは、ヤップ州民のアイデンティティの基盤である伝統として、州政府に認められたのである。

1996年、コロニアで行われたヤップデーでは、90年には行われていた陸上競技が姿を消し、90年には見られなかった「文化儀式」（culture ritual）が行われた〔Committee on Yap Day 1996〕<sup>〔注10〕</sup>。このプログラム内容は、2002年のプログラム内容と基本的には変わらない（表2（3）、（4））。今日見られるヤップデーの雛形は、この頃に形成されたのである。

1997年、ヤップデーは初めて2日にわたる開催となった。この年以降、ヤップデーの規模は次第に拡大されるとともに、海外に向けた宣伝も盛んに行われるようになった。1998年、沿岸警備隊駐屯地跡地で行われたヤップデーには、ミクロネシア連邦副大統領、在ミクロネシアの各国大使などの要人が多数招待された。またこの年には、1997年に本格的な活動を開始したヤップ州観光局（Yap Visitors Bureau）が、アメ

リカの新聞に対してプレスリリースを行い、ヤップデーに合わせた観光客の誘致を行った〔YSB 1998〕

1999年に沿岸警備隊駐屯地跡地で行われたヤップデーは、3日間の開催となった。この年には、観光局主催による観光客歓迎パーティが初めて行われた。パーティ会場となったコロニアの観光局前広場では、タロイモやヤムイモ、米、魚、肉のバーベキュー、サラダ、豚の丸焼きなどの料理が無料で観光客に振る舞われた他、伝統的な踊りも披露された。

2000年には、州立総合競技場の建設工事が沿岸警備隊駐屯地跡地で行われていたため（2001年完成）、ヤップデーの会場はトミル管区集会場に移された。この年のヤップデーにも、ミクロネシア連邦大統領や在ミクロネシアの各国大使などの政府要人らが招かれた。またこの年には、それまでヤップ語のみで行われていた州政府要人の演説や場内アナウンスが、初めてヤップ語と英語の両方で行われた。さらに観光局が、観光の目玉のひとつとして、インターネット上でヤップデーを紹介し始めた。ヤップデーは、ヤップの伝統を海外に向けてアピールする場として、さらには観光資源としても位置づけられるようになったのである。

## ヤップデーについての語り

### 1. アイデンティティ

確認できる限り、ヤップデーに関する最も古い言説は、1990年のヤップデー直前に出された州政府広報紙の記事である。この記事には、次のような見解が示されている。

「ヤップデーは、我々の伝統に認識をもた

らず機会として選ばれた、1年で唯一の日である……我々の歴史、伝統、文化などのおかげで、我々は、自分たちがどこにいて、日々どのように進んで行くべきかがわかる。それゆえ、ここ〔ヤップ〕に住んでいる人々は皆、この機会是非常に特別だと見なすべきであり、彼もしくは彼女は……伝統的衣装を身につけ、伝統的芸術を踊り演じるときは一生懸命にし、そして最も真なるヤップ人魂を可能にする機会を楽しむべきである」〔YSB 1990a, 4〕（原文英語、〔 〕内引用者）

州政府関係者によれば、「ヤップ人魂」（Yapese spirit）とはヤップの人々の考え方の中にあり、非常に持続性があるという<sup>（注11）</sup>。この記事では、ヤップの人々が自らの居場所や進むべき道を考える際には、「歴史」（history）や「伝統」（tradition）や「文化」（culture）が大きな役割を果たしていると述べられている。つまり「ヤップ人魂」とは、ヤップの人々の歴史や伝統や文化に基づいたヤップの人々の考え方を意味している。ヤップデーで披露される伝統的な衣装や踊りは、歴史や伝統や文化に根ざした「ヤップ人魂」を「最も真なる」（truest）形で体現するための、いわば媒体なのである。

ヤップデーの開会式における州知事演説では、「ヤップ人魂」とは異なる表現を用いつつ、同様の内容がより詳しく語られている。

「我々この〔ヤップ〕州の人々は、我々の存在を知る外部の者によって、最も伝統的なミクロネシアの人々であると見なされ、言われてきた。……変化は避けられない。そしてそのことを我々は知っている。……伝統のある部分を維持し、ある程度伝統的な人々であり続けることは、我々共通の望みであり、利



益なのだ」[ YSB 1990c, 5 ]( 1990年 ペトラス・トゥン知事, 原文英語, [ ] 内引用者 )。

「文化には変えることのできない核の部分と、文化が活力あるものであり続けるためには変えることのできる、また時には変えるべき部分とがある。……我々は、変えたり交換することのできる部分とできない部分を知らねばならない。……我々は、押し寄せるこれら [ 外部 ] の影響を食い止めることはできないのだ」( 2002年 ヴィンセント・A・フィギル知事, 英語演説, [ ] 内引用者 )。

「ミクロネシアで最も伝統的」とヤップの人々を形容する語りは、ヤップ社会と西洋社会との接触が始まった19世紀中頃より、航海記や民族誌、公文書などを通じて、繰り返し欧米や日本でなされている [ 染木 1940; 矢内原 1963; Walleaser n.d.; Yap District 1974 ]。こうした語りはしばしば、「残忍」、「奇怪」といった否定的なイメージと結びつけられていた [ 南洋庁 1939; Cheyne 1971; Tetens 1958 ]。しかし1990年の演説では、欧米で繰り返された「伝統的な人々」( traditional people ) という語りを肯定的に読み替えて、自ら引き受けることが宣言された。州政府は、西洋のオリエンタリズム的表象を逆手に取り、自己表象として利用していくことを表明したのである [ 太田 1998; Thomas 1992 参照 ]。

しかしこれらの演説は、伝統にこだわり社会変化に抵抗することを良しとはしていない。いずれの演説も、ある程度の社会変化は受け入れるべきだと主張している。変化する社会の中にあって、変化を受け入れながらも「伝統の核」( core of tradition ) を認識し維持しようとする態度、州政府はこれを人々に求めているのであ

る。そしてここでもまた、伝統的な衣装や踊りや物産は、「伝統の核」を喚起する象徴として位置づけられているのである。

「ヤップ人魂」や「伝統の核」がアイデンティティの基盤として位置づけられていることは、2000年の演説が端的に物語っている。

「……我々の文化、我々の慣習と伝統がなければ、我々は確実に、人として失ってはいけぬもの。我々のアイデンティティ、我々のプライド、そして我々自身への敬意を失ってしまう。……我々の踊り、我々の歌そして我々の伝統的衣装……それらは我々の過去を写し出し、我々の未来を考えさせてくれるのである」( 2000年 アンドリュー・ヤティルマン副知事, 英語演説 )。

ヤップデーにおいては、ヤップの伝統的衣装や踊りや物産は、アイデンティティの基盤を呼び起こす象徴なのである<sup>(注12)</sup>。

## 2. 観光

ヤップデーにおける伝統的な衣装や踊りなどは、ヤップの人々に対しては、アイデンティティの基盤である「ヤップ人魂」や「伝統の核」の象徴として提示されたが、外部の人々にとっては、これらはヤップの伝統の独自性や固有性の象徴となる。なかでも文化観光の場においては、これらの象徴が持つ独自性や固有性のイメージは大きな「売り」になる [ 吉岡 2001 ]。「ヤップ人魂」や「伝統の核」を想起させる諸要素が集うヤップデーを観光局が売り出し始めたのは、当然の成り行きであった。

州政府は早くから、ヤップの伝統が観光の目玉に成り得ることを指摘していた [ YSB 1992 ]。ただし、この時点で具体的な観光資源として挙げられた伝統は、手工芸品や島の食べ物など直

接売買の対象になるものや、カーヌーや木造建築などの伝統的建造物であり、伝統的な服装や踊りが観光資源として取り上げられることはなかった<sup>(注13)</sup>。しかし1993年、政府は「ヤップの文化を讃える祭典は、伝統的なミクロネシア文化が今なお見られる地として……ヤップを売り込む上で大変強力な意味を持つ」と述べ、ヤップデーを重要な観光資源として位置づけた〔YSB 1993〕。その後も政府は、伝統が観光開発の重要な資源であることをたびたび強調した〔YSB 1996a〕。

1997年以降、州政府はヤップ観光局を通じて、ダイビングやエコ・ツーリズムと並んで、文化観光に力を入れるようになった。翌1998年に観光局は、『ニューヨーク・タイムズ』紙や『ワシントン・ポスト』紙などのアメリカの新聞社にプレスリリースを行い、ヤップデーへの観光客誘致を行った。その冒頭部分では、次のような紹介がなされている。

「太平洋で最も特別なイベントのひとつがまもなく開かれます。毎年3月1日にはヤップの人々が集まり、彼らの独特な文化を讃えるのです。……西太平洋に位置するヤップ州は、ミクロネシアで最も伝統的な島です。新たなミレニアムを迎えようとしている世界のパラレル・ワールドでは、今日でも古代文化が残り、栄えているのです」〔YSB 1998, 1, 6〕  
(原文英語)

西洋において繰り返されてきた「伝統的なヤップ人」というオリエンタリズム的表象が、アイデンティティを表わす自己表象として流用されていることは先に指摘した。ところがここでは、「伝統的なヤップ人」という西洋から流用した自己表象が、表象を生み出した当の西洋に

向けて再発信されているのである。またプレスリリースの後半部分では、ヤップデーで「独特の文化」(unique culture)として披露される伝統的な衣装や踊りの解説が行われている〔YSB 1998, 6-7〕。州政府は、伝統的な踊りや衣装をアイデンティティを喚起する要素として位置づけていた。その同じ要素が、観光の場においては、「今なお残る古代文化」の証となっているのである。

観光局のホームページ〔Yap Visitors Bureau 2000〕では、ヤップデーがヤップの伝統を讃える日であることが冒頭で述べられた後、伝統的な踊りや衣装の説明が写真とともに掲載された。そして末尾には「ヤップデーはヤップの豊かな文化(rich culture)の真正な表現(authentic expression)であり、ごく最近観光客に開放されました」という一文が記された<sup>(注14)</sup>。アイデンティティを確認するための場であるヤップデーは、まさにそれゆえに、「真正な伝統文化」を表現する場として観光客に披露されるのである。

### 3. メディアによるヤップデー批判

観光局の活動により、ヤップデーは観光資源としての重要性を増しつつある。しかし州政府にとって、ヤップデーとはまずアイデンティティ確認の場である。そのためには、ヤップデーの会場は「真正な伝統文化」で満たされなければならない。しかし近年のヤップデーでは、踊り手以外に伝統的衣装を着用して会場に来る者はあまり見られない(写真2)。また会場には多くの屋台が並び、様々な商売を行っている<sup>(注15)</sup>。さらには、ヤップデー委員会は踊りを披露するグループに対して高額の出演料を払っている<sup>(注16)</sup>。

1999年に創刊された州政府広報紙の後継紙

写真2 踊り手と観客



(出所) 筆者撮影。

(*The Yap Networker: YN*) は、2000年のヤップデーの前後に、ヤップデーのこうした現状に対する批判記事を立て続けに掲載した[*YN* 2000a; 2000b; 2000c]。

「今や、祝日[ヤップデー]は昔とはすっかり変わってしまっている。……全ての人々が腰蓑や禪飾りを着けるところ,[そのような]ヤップ人は誰もいない。多くの人はこの祝日に、まるで外人のようにヤップの衣装を脱いで、連れだってやって来る。かつては島の人だった我々は,[ヤップの]衣装を脱いでしまっている。……我々が用意し日除けの下で食べるご飯とおかずも,ヤップの食べ物ではなく,店で買った鶏肉,米,麺類,コーラなど,様々な外国の食べ物が多い」[*YN* 2000b: 6](原文ヤップ語,[ ]内引用者)。

これらの記事は、本来ならば「ヤップ人魂」や「伝統の核」を喚起する象徴,つまり伝統的な衣装や踊りで満たされなければならないヤップデーに、現金や洋服,コーラ,屋台といった西洋起源の非伝統的要素が混入していることを指摘しつつ、「我々は……ヤップデー本来の目的を誤って解釈している」[*YN* 2000c, 5]と述

べている。さらに翌2001年のヤップデー後には、次のような記事が掲載された。

「……我々の伝統は,我々にアイデンティティや生き方,希望,そして我々が何者であり人間集団としてどこにいるのかを示す全てのものを与えてくれる。……しかし今では,我々はその行事[ヤップデー]を利益(現金やその他の貴重品)のために利用している。……我々は主にお金になるという理由で踊りを演じる。我々はお金にならないという理由で……伝統的衣装を着て参加しないのである」[*YN* 2001, 3](原文英語,( )内原文,[ ]内引用者)。

アイデンティティは、伝統的な踊りや衣装などの「真正な伝統文化」を通じてのみ表現され確認され得る。非伝統的な要素が増えれば増えるほど,アイデンティティは表現も確認もできなくなる。新聞で展開された一連のヤップデー批判は、現状のヤップデーはアイデンティティを確認する場にふさわしくない,という批判なのである(注17)。

## 人々にとってのヤップデー

### 1. ヤレンとヤアン(注18)

州政府やメディアが繰り返したのは、ヤップデーは伝統的な踊りや衣装や物産などの展示を通じて自らのアイデンティティを内外に示す場である,という主張であった。これに対して、島で普通に生活するヤップの人々は、政府やメディアの語りとは異なる形でヤップデーを捉えている。人々によるヤップデーの捉え方を理解するには、「ヤップの伝統」という語に相当する2種類のヤップ語を知る必要がある。第1

はヤレン・ユ・ワアブ ( *yalen yu Wa'ab* ), 第2はヤアン・ユ・ワアブ ( *ya'an yu Wa'ab* ) である(注19)。

まずはヤレン・ユ・ワアブである。ヤレンは「やり方」, 「関係」, 「ルール」を意味する名詞であり, ユは「~の人の」を意味する前置詞, ワアブは「ヤップ」を意味する名詞である。したがって, ヤレン・ユ・ワアブは「ヤップ(人)のやり方」と訳することができるが, それが実際に意味する範囲は日本語から想定される範囲よりも広い。食事の作り方や製品作成などの技術, 村や家庭でのルールやマナー, 葬式や交換儀礼などの手続き, 親族や家や村の関係。これら全てが, ヤレンの語によって示されるのである。意味する範囲の広さゆえに, この語は, ヤップの慣習と他地域の慣習を比較する際に頻繁に使われる。

次はヤアン・ユ・ワアブである。ヤアンは「格好」, 「姿形」という意味の名詞であり, ヤアン・ユ・ワアブは「ヤップ(人)の格好」を意味する。この語が言及しているのは外見のみであり, ヤレン・ユ・ワアブのように社会関係全般にまで意味が広がることはない。

繰り返し述べた通り, 州政府は, ヤップの伝統的衣装, すなわち男性は褌 ( *thuw* ), 女性は腰蓑 ( *ong* ) を着用してヤップデー会場に来るよう呼びかけている。伝統的衣装は, アイデンティティを体現するには不可欠だからである。しかし人々は, ヤップデーにおける伝統的衣装の着用をヤレン・ユ・ワアブではなくヤアン・ユ・ワアブと捉えている。ある首長は, ヤップの伝統的衣装には村の位階や年齢による違いが存在すること, ヤップデーではその違いが問題視されていないことを指摘した(注20)。実際, ヤ

ップデーにおいては, こうした衣装の違いはディスプレイとして展示されるのみであり(表2(4)), 政府はヤレンすなわち社会関係に基づく衣装の着用を訴えることはない。

ヤップデーではヤレンは問題ではないという認識は, ヤップデー委員会も持ち合わせている。2001年のヤップデー委員会の会議では, そのことを如実に示す議論があった。ヤップデー委員会は当初, 開会式に伝統的衣装を着た小学生による入場行進を行い, その後で全小学校がそれぞれ伝統的な踊りを出す予定にしていた。ヤップの格好をさせ, 踊りをさせることで, 子供たちのアイデンティティを育成しようというのがその理由であった。ところが小学校側の対応の遅れから, 入場式の実施は見送られ, 参加可能な小学校だけが踊りを出すことになった。教育省から参加していたヤップデー委員の1人は, 会場は首長同盟を統括するトミル管区なのだから首長同盟の村の子供が行進をすればいいと, 村の関係を持ち出して弁解した(注21)。これに対して他の委員たちは, 村の關係に従うことが目的だったのではない, 子どもたちにヤップの格好をさせることが目的だったはずだ, と厳しく反論した。この議論は, ヤップデーはヤアンの場, 格好だけの場であり, ヤレンの場, 社会関係を確認する場ではないことを端的に示している(注22)。

一般の人々も, ヤップデーはヤアン・ユ・ワアブの場ではあってもヤレン・ユ・ワアブの場ではないと見ており, またそうあることを望んでいる。トミル管区集会場で開かれた2000年から2002年のヤップデーの前には, 「政府の土地でするなら行ってもいいけど, 村の土地でするなら行かない」という発言がたびたび聞かれた。

人々の間では、村の土地はヤレンが支配する空間であるのに対し、政府の土地はヤレンが及ばない空間であると捉えられている。そのため、村の土地であるトミル管区集会場で開かれるヤップデーには、トミル管区の村々と関係を持たない村の人は、会場には行き辛いのである。ある男性は、「ヤップデーでヤレンを重視したら祭典どころではなくなってしまう」と端的に指摘した<sup>(注23)</sup>。ヤップデーにおいてヤレンすなわち社会関係が強調されればされるほど、アイデンティティの確認を目的とするヤップデーそのものが成り立たなくなってしまうのである。

そもそも、州政府がヤレン・ユ・ワアブに則してヤップデーを企画・運営することは不可能である。なぜなら、政府はヤレン・ユ・ンガブチャイすなわち「外人のやり方」であり、ヤレン・ユ・ワアブではないと見なされているからである。いくら政府の中で首長が一定の権限を有するとはいえ、政府がヤレン・ユ・ワアブの領域に直接介入することはない<sup>(注24)</sup>。あるヤップデー委員は「ヤレンに則してヤップデーをするなら、政府でなく各管区が運営すべきだ」と語った<sup>(注25)</sup>。州政府は、ヤップデーを服装や踊りなどの「ヤップの格好」で飾ることはできても、「ヤップのやり方」で行うことはできないし、またそうする根拠も持たないのである。

しかし、ヤップデーの開会式における政府要人のヤップ語演説では、「ヤップの伝統」の訳語としてヤレン・ユ・ワアブが使われる。つまり演説では、ヤップデーの伝統がヤアンではなくヤレンとして語られているのである。これに対してある首長は、ヤップデーで様々なヤレンが無視されている点を指摘しながら、「ヤップデーは本当のことをやっていない」と述べ

た<sup>(注26)</sup>。ヤップデーが「ヤップのやり方」ではなく「外人のやり方」に則して運営される以上、政府要人の演説でいくら「ヤレン・ユ・ワアブ」が強調されようとも、人々にとっては、そして州政府自身にとっても、ヤップデーで披露される<sup>ヤレン・ユ・ワアブ</sup>伝統はあくまで社会関係を伴わない格好なのである。

## 2. 踊りの実践

伝統的な踊り (*churu'*) は、ヤップデーの中心的な出し物である(写真1)。プログラム上、踊りは小学校から出される踊りと管区から出される踊りに大別される。上述の通り、ヤップデーはヤアンの場であり、そこで披露される伝統はもっぱらヤアンと見なされる。しかし管区から出される踊りに限っては、ヤアン・ユ・ワアブではなくヤレン・ユ・ワアブであるとされる。この一見矛盾する状況を理解するには、踊りの実践過程全体に目を向ける必要がある。

管区から出される踊りはピルン会議によって選定される。最初に、ヤップデー委員会がピルン会議に踊りの選定を依頼する。ピルン会議に出席している管区長は、自分の管区が踊りを出せるかどうかを判断する。出せると判断したら、管区長は管区の人々に話をして、どこの村のどの踊りを出すかが決められる。踊りを要請された村の村長は、村人に踊りへの参加を要請し、練習が始まる。

筆者が滞在していたルル管区のバラバット (Balebat) 村は2001年8月、管区長からヤップデーに男の踊りを出すよう要請された。ルル管区は大きく北部 (Kenrull)、中部 (Mirew)、南部 (Likaichog) に分かれており、北部にあるバラバット村とンゴログ (Ngolog) 村が、ルル管区最高位の村である(図1)。とりわけバラバ

ット村は、中部および南部の諸村の長に当たる村であり、ルル管区長には、ンゴログ村出身の前任者を除いて、歴代のバラバット村長あるいはその代理人が就任している。管区長の要請はバラバット村の男たちによる会議を経てすぐさま村の命令となり、9月から男の踊りの練習が始められた。バラバット村だけでは踊り手の人数が十分でないことから、管区長はヤレンすなわち関係の深い近隣のンゴログ村とウォルウォ（Worwoo）村にも、踊りへの参加を要請した。

ヤップでは、村の踊りは必ず以下の手順を経て行われる<sup>(注27)</sup>。踊りが新作ではなく、過去に演じられた踊りであれば、最初に年長者によって踊りの再演が行われる。これをピリグ・エ・チュル（*pilig e churu'*）すなわち「踊りを降ろす」という。

踊りを降ろした後、フォル・エ・チュル（*fol e churu'*）つまり「踊りの練習」が始まる。練習は非公開が原則である。とりわけ、互いに異性の練習を見ることは禁じられている。ヤップの踊りは通常、一列縦隊か二列縦隊になって行われるが、初めのうちは並ぶ順番は特に問題にされない。しかしある程度振り付けを覚えた段階でウブ・エ・チュル（*wup e churu'*）が行われ、「踊りの順番を指定する」。それ以降は、決められた順番に並んで練習しなければならない。

踊りがさらに上達した段階で、タン・エ・チュル（*tan e churu'*）が行われ、異性に初めて踊りが公開される。タン・エ・チュルとは「踊りの下」という意味であり、練習を見に来た人が踊りの前で座って見ている様子を表わしているという。

その後何度か踊りが異性に公開された後、スム・ブウ（*thum buw*）が行われる。スム・ブウ

とは「ピンロウジ<sup>(注28)</sup>を置く」という意味で、この時には、踊りを出す村の人々だけではなく、踊りを出す村と関係のある村の人々が踊りを見に集まってくる。その際に、他村から来た者は、踊りを出す村のためにピンロウジを持ってやって来る。踊り手はシンプルな飾りを身につけ、踊りを披露する。

スム・ブウの後に行われるのがグイウォル（*guywol*）である。グイウォルとは、村の集会所や男子小屋の落成式、あるいは首長の葬式や追善儀礼の際に行われる、首長が参加する大規模な交換儀礼（*mitmit*）を指す。踊り手は豪華な飾りを身に付け、うこん粉を溶いたヤシ油で黄色い化粧を施す。踊りが披露される前に、踊りを披露する管区や村の首長は必ず、グイウォルを主催する管区や村の首長に貝貨を渡して敬意（*sirow*）を表する。

グイウォルの後、もう一度盛大に踊りが行われる機会がある。それがモ・ト・チュル・ンガ・ラン（*moto churu' nga lang*）である。これは「踊りを上げる」という意味である。踊り手はグイウォルの時と同様、華やかな衣装に身を包む。この時にはガン・ニ・アルチェ（*ggan ni arche'*）、すなわち「鳥の餌」と呼ばれる、大量の貝貨や腰布、食べ物、菓子、ジュース、ビール、ウォッカ等が、首長やその他の見学者に配られる。一旦上げられた踊りは、次に踊りを降ろすまで決して披露されない。

バラバット村の男の踊りでも、こうした手続きは全て行われた。9月の初めに踊りが降ろされ、翌週から踊りの練習が始まった。踊りは村の命令（*lungun e binaw*）として行われるため、バラバット村および参加要請のあった村の人々は全員、踊りの練習に参加しなければならない。

しかし実際には、バラバット村の男たちの約3分の1の人々が踊りには参加せず、他の2村からの参加者は非常に少数であった。踊りの参加者からは、不参加者への制裁を求める声が出た。首長たちは、不参加者に対して踊りに参加するよう説得を続ける一方で、不参加を続けるようであれば制裁を加えるとの姿勢を固めていった。

12月に踊りの並ぶ順番が決められた。翌1月には女性に踊りが公開され、2月には2度の予行練習が行われた。通常、予行練習は一度しか開かれないが、この時首長たちは、1度目の予行練習は踊りに参加する村の村人だけを招待し、2度目の予行練習はバラバット村の配下にあるルル管区中南部の村の首長も招待する、と説明した。予行練習を2度行うというこの決定に対しては、予行練習を2度もやるのはヤレンに反している、つまり正しいやり方ではないという声が多く聞かれた。しかも2度目の予行練習には、招待されたはずの中南部の村の人々が来なかった。バラバット村と中南部諸村のヤレン、すなわち主従関係を無視したこの出来事は、後に大きな問題へと発展することになる。

3月のヤップデーはグイウォルとして位置づけられ、踊り手たちは華やかな飾りを着けて踊った。しかしバラバット村の村長でもあるルル管区長は、会場となっているトミル管区の管区長や主催者であるヤップデー委員会に、出すべき貝貨を出さなかった。この行為は人々からの批判の的となった。グイウォルの時に主催者に貝貨を出さないのは、ヤレンに反しているからである。

ヤップデーの終了後、ヤップデー委員会は管区長に出演料600ドルを支払った。即座に村の会議が開かれ、このお金は、踊り上げに訪れた

写真3 バラバット村のモト・チュル・ンガ・ラン



(出所) 筆者撮影。

客への土産など、必要な物資を買うために使われることが決められた。同時に、踊りに参加しなかったバラバット村の人々に対しては罰金 (*bakking*) として、また踊りの参加者が極端に少なかったンゴログ村とウォルウォ村に対しては援助 (*ayuw*) として、それぞれ必要な物資の供出が割り当てられた。

ヤップデーの2週間後、踊りが上げられた(写真3)。本来であれば、踊りを上げる時にも中南部諸村の首長たちは招待される。しかし、予行練習の時に彼らが来なかったことに腹を立てた管区長は、彼らを招待しなかった。踊り上げの終了後、個人的にやって来た南部の村の男が、酒に酔った勢いで「我々はもう北部には従わない」と口にした。この発言は、バラバット村の中南部諸村に対する権威を公然と否定するものであるとして問題となり、翌週、管区全域の有力首長や年長者による会議が行われた。この会議で、予行練習に中南部諸村の首長が来なかった理由が「首長間の連絡ミス」のためであることが「明らか」となった。会議では、バラバット村と中南部諸村とのヤレンが改めて確認されるとともに、暴言を口にした男と彼の村の

村長は、管区長に貝貨を支払って謝罪(*buyul*)した。

以上が、ルル管区バラバット村の踊りの実践と、それにまつわる主な出来事である。これら一連の過程からわかるように、踊りの実践はヤレンと深く結びついている。確かに踊りはヤップデーのために準備され、州政府から出演料を受け取っている。しかし踊りの実践で常に重視されるのは、踊りのプロセスの正しさであり、首長の発する村の命令であり、村と村との関係である。踊りの実践過程でヤレンが常に意識されるからこそ、ヤアンの場たるヤップデーで披露される村の踊りは、ヤレン・ユ・ワアブと見なされるのである(注29)。

## おわりに もつれ合う伝統

州政府やメディアが語る伝統は、アイデンティティの基盤としての伝統である。政府は、ヤップデーという「伝統の祭典」を通じて、人々にアイデンティティの確認を期待する。メディアは、ヤップデーを真正な伝統で満たすことがアイデンティティの確認には必要だとの立場から、非伝統的要素が混入している現状のヤップデーの非真正性を批判する。ヤップデーが文化観光の資源たり得るのも、ヤップデーで披露される伝統がアイデンティティの基盤として真正性を期待されているからこそである。このように、州政府やメディアが語る伝統は、アイデンティティという近代的な政治課題と深く結びついている。

これに対して、ヤップの人々が語る伝統は、むしろ社会関係の有無と密接に関連している。

人々の語りにおいては、ヤップデーにおける伝統は社会関係を伴うヤレンではなく社会関係を伴わないヤアンである。外人のやり方すなわちヤレン・ユ・ンガブチャイたる州政府が主催するヤップデーは、ヤップの社会関係すなわちヤレン・ユ・ワアブを問題としないからこそ州の祭典たり得る。確かに、ヤップデーの伝統を構成する中心的要素である伝統的な踊りは、ヤアン・ユ・ワアブではなくヤレン・ユ・ワアブとされている。しかしそれは、ヤップデーがヤレンと何らかの関わりを持つことを示しているのではなく、ヤップデーで披露される踊りの実践過程全体がヤレンと結びついていることを示している。

政府要人の演説では、英語の「ヤップの伝統」の訳語にヤレン・ユ・ワアブが当てられている。この翻訳を通じて、日常生活で語られるヤレン<sup>ヤレン</sup>伝統は近代性を帯びた伝<sup>トラディション</sup>統へと変換され、両者の概念上の差異は消去される。ここに、メラネシアの国家エリートらが行うのと同様の「伝統の政治」が見出される〔吉岡 2000, 176-178〕。人々だけでなく州政府もまた、ヤップデーが社会関係を伴うヤレンの場ではなく外見のみのヤアンの場であることを承知している。にもかかわらず政府要人の演説では、ヤップデーとヤレンは結びつけられる。こうした演説は、人々にとってはもはや「本当ではない」。政府要人の演説は、その語り方ゆえに、日常的な伝統の語りにおいては非真正とされるのである。

人々の語りとメディアの語りのいずれも、ヤップデーの伝統の非真正性を指摘しているが、その内容は異なっている。メディアの語りは、非伝統的要素が混入しているという理由で現在のヤップデーが真正な伝統を体現していないと



批判する。しかしこの批判は、伝統がアイデンティティの基盤であるという見方を州政府と共有しているため、その背後にある「伝統の政治」のあり方は問題とされていない。これに対して人々の語りは、ヤアンの場であるヤップデーでヤレンを唱える政府要人演説の語り口が非真正であると批判する。人々のこうした語りが存在するために、日常的な伝統と近代的な伝統とを直接結びつけようとする「伝統の政治」は骨抜きになってしまうのである<sup>(注30)</sup>。

文化の客体化論や異種混淆論のカストム論は、政府や現地人エリートらの「主体性」を評価する。しかしこれらの議論は、地域社会の日常的な伝統の語りを議論の対象から外してしまった。そのため、政府や現地人エリートらによる、地域社会の日常的な伝統と近代性を帯びた伝統の巧みな変換に基づく「伝統の政治」のあり方や、人々の日常生活における、「伝統の政治」の形骸化をもたらすような伝統の語りは看過され続けた。地域社会で展開する様々な伝統の語りの「もつれ合い」を解釈するためにも、日常生活における伝統の語りは積極的に検討・分析されなければならない。

(注1) ヤップの人々は、祝日としてのヤップデーも祭典としてのヤップデー・フェスティバルも区別せずに「ヤップデー」と呼んでいる。したがって以下でも、この両者をともにヤップデーと表記する。

(注2) カストム(*kastom*)とは、「文化」、「慣習」、「伝統」を意味するメラネシア・ピジン語である。

(注3) ヤップ語の表記についてはジェンセンの表記法[Jensen 1977]があるが、本稿では、ヤップの人々が一般的に用いる聖書の表記法に従う。

(注4) しかし若者同盟の勢力増大により、現在ではトミルの最長老は、ルルの最長老とともに首長同盟を統括するとされている。

(注5) ヤップにおける議会政治と首長制の歴史的関係、ならびに首長会議の現在の活動については、柄木田(2000a)、須藤(1993)、則竹(2000)、Lingenfelder(1975)、Marksbury(1982)、Meller(1969)を参照。

(注6) 国連記念日は今日でもミクロネシア連邦の休日である。国連デーのイベントは、1996年の時点では競技会のみが行われ、伝統的な踊りは行われなくなっていた[YSB 1996b]。2000年以降は競技会も開かれていない。

(注7) 信託統治時代の議会は、信託統治領市民の議員によって構成される立法機関であったが、法案の成立には地区行政官(District Administrator)および高等弁務官(High Commissioner)の承認を必要とした。なお1968年、ヤップ離島からの代表を含まなかったヤップ島議会(Yap Island Congress)は、離島からの代表も加えたヤップ地区議会(Yap District Legislature)へと改組され、さらに1979年のミクロネシア連邦およびヤップ州の成立とともにヤップ州議会(Yap State Legislature)となった。

(注8) 「ヤップデー」という呼称自体は法改正以前から使用されていた[CO 1977]。

(注9) しかし実際のヤップデー委員会には、この5名に加えて、教育省や建設交通省、財務局、農業局、水産局、歴史保護局、観光局といった政府の各局からの役人もメンバーとして加わっている。

(注10) 何が「文化儀式」として行われたのかは定かではない。なお、陸上競技が行われなかったのは、ヤップデー委員会が、西洋起源である陸上競技はヤップの伝統を確認し表現するヤップデーにはふさわしくないと判断したためである、と考えられる。その一方で開会式には、ヤップの伝統宗教ではないキリスト教の神父や牧師が祈りを捧げている。その理由としては、ヤップの人々のほとんどがキリスト教徒であることや、ヤップの伝統のうち良いものはキリスト教の神によって与えられたという見解が、数の上で優勢を占めるカトリック信者を中心に受け入れられていることなどが挙げられよう。

(注11) 2002年、ミクロネシア連邦歴史保護局への報告書[Noritake 2003]に対するビルン会議のメモ

ント。

(注12) ヤップ州には、本島であるヤップ島以外に多くの離島がある。本島と離島の間には文化的な差異が認められる一方、サウエイ (*sawei*) と呼ばれる伝統的な朝貢 = 主従関係があり、本島の人々は、離島を隷属村と同様の位置づけにあると見なしている。ヤップデーにおいて「州民の伝統」として表象されるのはヤップ本島の伝統的要素のみであり、離島の伝統的要素は表象されない。本稿は、ヤップデーで表象されるヤップ本島の伝統的要素を議論の対象としたため、ヤップデーで表象されない離島の伝統的要素をめぐる問題を扱うことはできなかった。この問題を把握するには、本島と離島の間を、伝統的な朝貢 = 主従関係としてだけでなくエスニック関係として捉える必要があると同時に、本島や離島の人々がこの関係をいかに位置づけようとしているのかについても検討しなければならないだろう。近年における本島と離島の間、および離島内部の文化表象をめぐる問題については、柄木田が様々な事例をもとに考察を行っている [ 柄木田 1997; 2000b; 2002 ]。なお、ここで取り上げた2000年の演説は離島出身の副知事によって行われているが、これはヤップデーの前日にヤップ本島出身の知事が負傷してヤップデーへの出席を取り止めたため、急遽副知事が知事演説を代読したことによる。

(注13) 観光資源としての伝統に対するこうした見方は、当初のヤップデーの目的が地元産業の育成にあったことと決して無縁ではあるまい。

(注14) Yap Visitors Bureau (2000) はすでに削除されている。現在のより簡略化された紹介文 ([http://www.visit Yap.org/events/event\\_details.cfm?eventID=fasdsadfd](http://www.visit Yap.org/events/event_details.cfm?eventID=fasdsadfd)) には当該記述はない。

(注15) 屋台はすでに国連デー当時から並んでいたが [ RV 1966, 2 ], ヤップデーの会場が沿岸警備隊駐屯地跡地に移されて以降、その規模は拡大したともいわれている。

(注16) 踊りの種類にもよるが、現在ではひとつの踊りに対しておよそ450~600ドルが支払われる。

(注17) 政府広報紙の後継紙として立ち上げられたこの新聞は、今もなお政府広報紙としての役割も担っている。したがって、この新聞による一連のヤップデー

批判は、ヤップデーを企画・運営する政府ではなく、むしろヤップデーに参加する人々に向けられているといえるかもしれない。

(注18) 以下の記述は、則竹 (2003) の第4節と一部重複する。

(注19) これらと意味の類似した表現に、ヤレン・ニ・カクロム (*yalen ni kakrom*) がある。この語は「昔のやり方」を意味し、ヤレン・ニ・ベエチ (*yalen ni be'ech*) すなわち「新しいやり方」との対比において語られる。ヤップ社会におけるこれら3種類の伝統概念については、則竹 (2003) 参照。

(注20) 2001年、コロニアにおけるインタビュー。

(注21) 注4参照。なお、公の場で子供たちが行進すること自体、ヤップのヤレンにはない。

(注22) 伝統的衣装を身につけた子供たちによる行進は、翌2002年には行われた。この時、「ヤップデー：我が子たちの文化的アイデンティティの感覚を育むために」(Yap Day: To nurture [ sic. ] our children's sense of cultural identity) と書かれた横断幕が、子供たちの手で掲げられた。

(注23) 2001年、コロニアにおけるインタビュー。

(注24) ヤレンに関わる民事訴訟については、首長や年長者が判事を務める管区裁判所が担当する。また刑事事件については、連邦最高裁判所が独占的な管轄権を持つ「主要犯罪」(major crime) を除いては、首長と州警察および州司法当局とが相談の上、州裁判所に起訴するかどうかが決められる。連邦最高裁判所における伝統の扱いについては、ベンソン (1992) を参照。

(注25) 2001年、コロニアにおけるインタビュー。

(注26) 2000年、ファニフ管区におけるインタビュー。

(注27) 踊りの手順はどこでもほぼ同じであるが、各手順の名称は管区や村によって多少異なる。本稿で用いるのは、全てバラバット村での名称である。

(注28) ビンロウジとはビンロウヤシの果実の通称であり、南アジアから東南アジア、さらにはミクロネシアやメラネシアの一部にかけて嗜好品として愛用されている。

(注29) ヤレン・ユ・ワアブと見なされる村の踊り

がヤアン・ユ・ワブの場であるヤップデーで披露されることにに関して、人々からの否定的見解はほとんど聞かれない。この事実もまた、人々の関心が、踊りが披露される場ではなく踊りのプロセスにあることを示している。

(注30) 人々のこうした語りは、必ずしも政府の語りへの批判や抵抗を意図しているわけではない。

## 文献リスト

### 日本語文献

- 石森大知 2001. 「カスタムとファッション ソロモン諸島ヴァングヌ島における過去と現在をめぐる認識論的連関」『民族学研究』66(2): 222-239.
- 太田好信 1998. 『トランスポジションの思想 文化人類学の再創造』世界思想社.
- 小田亮 1997a. 「ポストモダン人類学の代価 ブリコールの戦術と生活の場の人類学」『国立民族学博物館研究報告』21(4): 807-875.
- 1997b. 「文化相対主義を再構築する」『民族学研究』62(2): 184-204.
- 柄木田康之 1997. 「オレアイ環礁における文化確認とその余波」『民族学研究』62(1): 86-101.
- 2000a. 「ミクロネシア連邦ヤップ州の伝統的首長と政治統合」須藤健一編『オセアニアの国家統合と国民文化』JCAS 連携研究成果報告2: 35-59.
- 2000b. 「メゾ・レベルとしての世帯戦略とライフ・ヒストリー ミクロネシア連邦ヤップ州の離島からみた都市化」熊谷圭知・塩田光喜編『都市の誕生 太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容』アジア経済研究所.
2002. 「ヤップ離島の土地獲得戦略における階層関係の持続と変容」塩田光喜編『島々と階級 太平洋島嶼諸国における近代と不平等』アジア経済研究所.
- 白川千尋 2001. 『カスタム・メレシン オセアニア民間医療の人類学的研究』風響社.
- 杉島敬志 1999. 「序論 土地・身体・文化の所有」杉島敬志編『土地所有の政治史 人類学的視点』風響社.

- 須藤健一 1993. 「首長がコントロールする国家 ミクロネシア連邦の政治の現在」清水昭俊・吉岡政徳編『オセアニア3 近代に生きる』東京大学出版会.
- 染木煦 1940. 「石貨島土俗断片」『民族学研究』6(2): 194-236.
- 南洋庁 1939. 『南洋群島要覧』.
- 則竹賢 2000. 「植民地支配下におけるミクロネシア社会の変容 ポーンペイ島とヤップ島の事例より」『民族学研究』65(2): 168-189.
2003. 「ヤップのやり方、昔のやり方、ヤップの格好 ミクロネシア・ヤップ社会における『伝統』概念の分析」『年報人間科学』24: 87-105.
- ベンソン, R 1992. 「ミクロネシア連邦の司法における伝統と慣習」糟谷浩司・小川富之訳 畑博行編集代表『南太平洋諸国の法と社会』有信堂高文社.
- ホブズボウム, E/T・レンジャー編 1993. 『創られた伝統』(前川啓治他訳) 紀伊国屋書店.
- 矢内原忠雄 1963 [1935]. 『南洋群島の研究』矢内原忠雄著作集第3巻 岩波書店.
- 吉岡政徳 2000. 「カスタムとカスタム オセアニアにおける伝統概念研究の批判的考察」須藤健一編『オセアニアの国家統合と国民文化』JCAS 連携研究成果報告2: 143-182.
2001. 「オセアニアの『売り』と人類学的姿勢」『民博通信』94: 100-112.

### 英語文献

- Aoyama, Toru 2001. "Yap Day: Cultural Politics in the State of Yap." *Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands Occasional Papers* 34: 1-13.
- Cheyne, Andrew 1971. *The Trading Voyages of Andrew Cheyne, 1841-1844*. ed. Dorothy Shineberg. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Jensen, John T. 1977. *Yapese-English Dictionary*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Jolly, Margaret 1992. "Specters of Inauthenticity." *The Contemporary Pacific* 4(1): 49-72.
- Jolly, Margaret and Nicholas Thomas eds. 1992. *The Politics of Tradition in the Pacific. Oceania* 62(4) (Special

Issue ).

- Keesing, Roger M. 1989. "Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific." *The Contemporary Pacific* 1(1&2):19-42.
- Keesing, Roger M. and Robert Tonkinson eds. 1982. *Re-inventing Traditional Culture: The Topics of Kastom in Island Melanesia*. *Mankind* 13(4) (Special Issue).
- Lindstrom, Lamont and Geoffrey M. White eds. 1994. *Culture, Kastom, Tradition: Developing Cultural Policy in Melanesia*. Suva: Institute of Pacific Studies, The University of South Pacific.
- Lingenfelter, Sherwood G. 1975. *Yap: Political Leadership and Culture Change in an Island Society*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Marksbury, Richard A. 1982. "Legislating Social Order: An Example from the Yap Islands." *Oceania* 53(1): 19-28.
- Meller, Norman 1969. *The Congress of Micronesia: Development of the Legislative Process in the Trust Territory of the Pacific Islands*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Noritake, Masaru 2003. "'Yapese Tradition' and *Yalen yu Wa'ab*: The Cultural Representation and Practice of Yap Day." Final Report for National Historic Preservation Office, Federated States of Micronesia.
- Tetens, Alfred 1958 [1888] *Among the Savages of the South Seas: Memoirs of Micronesia, 1862-1868*. trans. Florence M. Spoehr. Stanford: Stanford University Press.
- Thomas, Nicholas 1991. *Entangled Objects: Exchange, Culture and Colonialism in the Pacific*. Cambridge: Harvard University Press.
1992. "The Inversion of Tradition." *American Ethnologist* 19(2): 213-232.
- Walleaser, Sixtus n.d. "Religious Beliefs and Practices of the Inhabitants of Yap (German South Seas)." Micronesia Area Research Center Reference, University of Guam.
- White, Geoffrey M. and Lamont Lindstrom eds. 1993. *Custom Today*. *Anthropological Forum* 6(4) (Special

Issue ).

and eds. 1997. *Chiefs Today: Traditional Pacific Leadership and the Postcolonial State*. Stanford: Stanford University Press.

Yap Branch of Statistics Office 2002. *2002 Annual Statistical Yearbook, Yap State*.

Yap District 1974. *Welcome to Yap District: Island of Stone Money and Lava-Lavas*. Colonia: The Good News Press.

#### 新聞記事

CO ( *The Carolines Observer* ) 1977. "Yap Day Celebration." March 11: 7.

RV ( *The Rai View* ) 1963. "Over 2,000 in Yap UN Day Celebration." November 1: 1.

1966. "United Nations Day Program." October 26: 1-2.

YN ( *The Yap Networker* ) 2000a. "What Is Yap Day Really about?" February 11: 13.

2000b. "Madnam ko Nam Rok yu Waab ( Yap Day )" [ ヤップ人の島の祝日 ( ヤップデー ) ] February 25: 6.

2000c. "The True Purpose of Yap Day." March 3: 5.

2001. "Yap Day, Not Just Another Holiday." March 16: 3.

YSB ( *Yap State Bulletin* ) 1990a. "Yap Day Only Few Days Away." February 23: 4.

1990b. "Traditions to Be Feted." February 23: 4-5.

1990c. "Yap Day Events Feature Displays, Sports, Speeches, Traditional Dances." March 23: 5.

1992. "Visitor Industry Provides Opportunities for Many." October 2: 1, 6-7.

1993. "Tourism: Risk or Opportunity?" October 29: 5-7.

1996a. "Economic Development Starts with Us." April 12: 4, 6.

1996b. "United Nations Day Games Final Results" November 8: 2, 3, 5, 7.

1998. "Yap Day Celebration Scheduled for Two Days, March 1 & 2, 1998." February 13: 1, 6 7.

パンフレット等

Committee on Yap Day 1996. Yap Day 1996 Program.

2002. Yap Day 2002 Program.

Yap Visitors Bureau 2000. "Yap Day." Published Document on Website (<http://www.visit Yap.org/yapday.htm>, March 7, 2002 ).

[ 付記 ] 本稿は、1999年3月、2000年1月～2002年4月、2002年9月～12月にヤップ島で実施した調査に基づいている。2000～2002年の調査は、1999～2000年度大和銀行（現りそな）アジア・オセアニア財団国際交流活動助成、2002年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）、ミクロネシア連邦歴

史保護局とヤップ州歴史保護局の調査許可により可能となった。現地滞在中は、筆者を受け入れて下さった故ケンメド首長ご一家、ロフネク・フラワアスさんご一家、エルヴィラ・ティナグさんご一家をはじめとして、様々な人々のご協力を賜った。ミクロネシア連邦歴史保護局への報告書 [ Noritake 2003 ] に対するピルン会議のコメントは、本稿を執筆する上で大変参考になった。大阪大学の春日直樹先生と中川敏先生、宇都宮大学の柄木田康之先生、東京外国語大学の青山亨先生、2名の匿名査読者からは、草稿に対する貴重なコメントや御批判を頂戴した。以上、ここに謹んで謝意を表する。

（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）